

『場所の声を聞く 建築環境デザインの実践 - 次代を担う学生に伝えたいこと、一緒にやっていること』

JIAまちづくりセミナー(2010.10.21)より

建築家、関西大学教授 江川直樹

江川です。よろしくお願ひいたします。この講演会を依頼された時に、若い人に対しての内容にして欲しいということでお受けしたのですが、拝見させていただき限り、昔若かった方もいらっしゃるようでどうしようかなと思っています(笑)

ご紹介いただきました「場所の声を聞く - 建築環境デザインの実践 - 」という今回の内容ですが、来年発売予定の『場所の声を聞く』というタイトルの書籍で、具体の事例等も詳しく紹介していますので、お読みいただければ幸いです。

話を始める前に余談ですが、私は明日、広島で、ある大学の四回生、院生にむけて特別講義をします。四回生の就職率がなかなか厳しく、学生さんたちが慌ただしくしているということも聞いていますので、私の学生時代のそのような話も織り交ぜて話をしたいと考えています。そして、そこからテーマの「次の時代はいつたいどうしていけばいいのだろうか?」ということに話が繋がっていけばいいなと思います。

私の父はある組織設計事務所の大阪事務所の代表をしていました。市役所や公会堂の様な公共施設の設計が多かったようです。父は、私に建築設計をやらせたかったようでした。しかし私はそのような種類の施設の設計にはあまり関心が持てませんでした。大学も建築学科を受験はしましたが、建築学科に受からなかった場合は、当時映画やテレビ等でよく見聞きしていた正義の使者(単純にそう思っていた)弁護士になりたかったですね。早稲田大学の願書を取り寄せると三部入っていましたので、こっそり文系も出願しまして、建築以外の学部だけ受からないかなと思ったくらいでした。しかし、結果的には建築の道に進むことになりました。学生時代は丹下さんの事務所や槇さんの事務所、できたばかりの三井所さんの事務所等、いろいろな所にアルバイトに行きました。ここから先は普段、大学では話さないことですが、

大学院に進学しましたが、自分が建築という物を通して何をしたいのかまだはっきりとしなかったもので、就職せずに進学の道を選んだということです。大学四回生の授業では、コルビジエが提唱したような輝ける都市風のものや、丹下さんの東京計画のような、大きな複合建築物・複合都市をつくるような都市計画・設計の課題もあって、講師として内井昭蔵さんなどが教えに来てくださっていました。しかし、そのような大きな複合施設にもそんなには興味を持ってませんでした。そんなこんなで建築の意味がよく分からなくなり、大学院に進学したのでした。大学卒業の頃は好景気の真ただ中でしたが、大学院を卒業する時はちょうどオイルショックで、就職状況は激変していました。それでも、夏前には丹下事務所に行くことが決まっていたのですが、僕には関係のない事情で、卒業前に急遽内定取り消しになったのでした。

卒業した後の四、五月は、当時東京にたくさんあった、「名画座」という古い映画をやっている映画館で毎日、三、四本と、ひたすら映画を観ていました。ちょうど、寺山修司の「書を捨てて街に出よう」という、学生は家で本を読むより街に出るべき・・・などという時代でもありました。

その後いろいろな会社や事務所に声をかけていただいたりもしたのですが、どうしても思い切りがつかず、そんな生活を続けていました。結局、六月頃にある組織設計事務所に行くことになり、三ヶ月の研修を経て就職する機会を得たのですが、建築を通して何をしたらよいかということに確信がなく、研修を終えてから結局、就職を断ったのでした。仕事の区切りがつくまで、その後もその事務所で働いていましたが、いよいよ退社という時に、話を聞きつけたようで、大学院の時にアルバイトをさせていただいていて誘いも受けていた現代計画研究所の人から食事の誘いがあり、時間があるのなら明日から手伝ってくれないかということになって、結局、そのまま長い間お世話になることになったという訳です。

意味のないことかもしれませんが、その当時、丹下さんの事務所に就職していたとしたら、ここでこのような話をしていることはなかったでしょうし、大学に行く(教員になる)なんていうことも、まったく想像すらしていませんでした。実は、十数年前、同じように集住の設計をされている遠藤剛生さんと、大学には入かないで仕事をしようと約束しあったのですが、いまでは二人とも大学人です。(笑)

ではなぜ大学人になっているかと言いますと、大学当時に一般的だった、あるいは教科書に載っていたような建築への捉え方、例えば建築計画のようなものが、今では何か違うなとより強く思うようになったからです。

ここで皆さんに質問させていただきます。「あなたにとって『建築』とは何でしょうか？」

(観客A)「楽しいことです。夢中になれることです。」

(江川)「それはあなたが夢中になれるということですか？」

(観客A)「はいそうです。今はそう思っています。」

(江川)「ではその他の方にも質問させていただきます。学生さんの方は？ あなたにとって『建築』とは何でしょうか？」

(観客B)「僕が楽しいことです。」

(江川)僕が大学に入学し建築を始めた時や組織事務所に就職しようとした時、周りの人はみな、本人が建築を好きでしたね。しかし、僕は『誰のために・何のために』建築に夢中になるのか、自分が建築をする意味というものが、少なくともその当時に学校で教えてもらったものとは違うのではないかと思っていました。また、事務所に勤め始めた頃も、あまりそういったことを考えている余裕がなく、施主への提案が却下されたりすると、何のために建築をしているのかわからなくなるときがありました。しかし最近、大学に行きだして、自分にとっての建築とはこういうものなんだと納得できるようになってきた気がしています。

いろいろ誘われもしましたが、結局、関西大学に行くこととなりました。当時、関西大学の建築は「工学部の建築学科」でしたが、次代の建築の在り方を考えるという意味の新しい研究室名をつけるように、建築意匠研究室の川道先生と都市設計研究室の丸茂先生に勧められ、「建築環境デザイン研究室」とすることにしました。

「環境デザイン」という名前はよくあるのですが、設備のデザインだったり、ランドスケープとして用いられる用語でした。また、一般的に「建築デザイン」というものは、一つの建築物をプロポーショナルや機能を考えて設計をするというものですし、従来の「建築計画」といわれるものも建物内部の動線が効率的かとか、用途としての機能といったことが重視されているものです。

しかし私は、その周りの環境や、それを使う人によっても「建築」は異なるのではないかと思います。例えば、外に綺麗な景色が見えるような場所や、朝日が昇る方向によってもプランニングは異なってくるし、例えば季節や時間によって外の風景も変わるので食事の場所を変えるといったこともあると思いますので。関係性の中でプランニングは異なってくると思います。近年、日本の建築自体はよくなってきたと言われますが、街に関してはまだまだ綺麗でないですし、むしろ混乱していているように思います。全体の環境をよくするために建築がどうあるべきかということを僕たちが学生の頃はもちろん教えていなかったし、今でもそういったことはあまり教えていないかもしれません。

私はたまたま現代計画研究所に入り、藤本昌也さんのもとで次第にそういったことを考えるようになっていきました。多くの方が充実して暮らすことができるために、全体の環境に対して建築がどうあるべきかということには、従来の考えである「建築単体がよくなる」ということは当然必要かもしれませんが、そういった考え以外の“街を考えること”みたいなことがあるのではと思っています。

そこで、そういったことを言葉で表そうと、「建築環境デザイン」という言葉をつくり、研究室の名前としました。しかし大学では学生が研究室のことを「環デ」と呼んでいます。建築がはいつていることが重要なので、建築は抜かないで欲しいのですがね。(笑) あくまで全体の環境に対して建築がどうあるべきかということを忘れないで欲しいですね。

「場所の声を聞く」ということなのですが、この話は六甲山頂の展望台シンポの際にもお話しているのですが、建築の専門家としての仕事とはいったい何なのか？ それが自分の人生とどういった関係をもっているのか？ 建築の専門家故にできることとは何であろうか？ と考えた場合、場所との関係性を見つけること、場所の持っているポテンシャルを探り出して社会化(社会に具体化させる)することだと思います。

必ずしも物をつくる事だけが建築ではなく、また建築が社会のニーズに応えるものだとするのであれば、そのニーズとは「潜在的なニーズ」でないかと思っています。ここでいう「潜在的なニーズ」とは、人々が気付いていないけれども重要なことを示しています。私は自分自身が、その環境に身を置いたときにいいなと思うことや、昔は一般的であったけれども忘れられてしまったことなど、そういったことを社会化して共有するプロデューサーであったらいいなと思っています。

いろいろな建築家が自分の考えを語っているのですが、ルイス・カーンは物をつくることは余り言わず、空間を発見することとよく言っています。自分がどうしたいかではなく、すべての物がどうなりたがっているのかということに対して耳を傾けるという表現をします。そしてそれを具体化することが自分の仕事だと言っています。また、ミケランジェロは自分が作りたいものを作っているのではなく、自分の作っている物は神様が自分の手に宿り作られていくものだと言っています。彼は作られていく源泉というものが特に何かとは言っていないのですが、カーンは「場所」が源泉であると言っています。私はカーンの言うような場所は、ただの場所ではなく、社会的な要素を含んだものだと思っています。

私はものを作るということは、場所に対して、施主や施工者や、その他いろいろな人やものが混ざり合い、そういった全体の環境の中で何かを発見し作っていく、共同作業みたいなものになっていくのではないかと考えています。

私が31歳の時に、当時のJIA事務局長の方に頼まれて建築について思っていることを話す機会がありました。その時に今回と同様に「場所の声を聞く」という話をしました。その当時から、敷地は、どうして欲しいのかを言っているのではないかと考えており、そこに設計者や住み手や工務店などいろいろな状況が混ざり合って、その場所にしかないものができるのではないかと考えて話をしました。当時、そのようなことを言っている建築家はなくて、あとで知ったのですが、唯一、カーンに近いことを言っていたのです。

最近、大学に行くようになり、自分の考えにかなりあうような本に出会いました。その本はクリスチャン・ノルベルク＝シュルツの「ゲニウス・ロキ」という本です。私はそれまで、学生と自分の考えに対して議論を交わすようなことをあまりしなかったのですが、今年のゼミでは、この本を読んで皆で議論をしてもらおうようなことをしています。この本では具体的な場所も例にあがっていて、「ローマ」「プラハ」「ハルツーム」という3つの都市を題材に、彼の考えを説明しています。彼はこの他にもいろいろな本を書いているのですが、彼自身もなかなか自分の考えを整理できず、この本に至ってようやく自分の考えを整理できたと言っています。

この本の文章は難しいですが、内容はそんなに難しいことはありません。内容としては、建築の役割とは一体何かということに対して、人間に「実存的足掛かり」を与えることと言っています。「実存的足掛かり」と「住まうこと」とは同じことなので、結局「住まうこと」だと言っているのです。「住まうこと」と「住むこと」は社会学的や地理学的には全く違う言葉です。単純に言えば、人間は生きていくことが目的であり、そのことが「住まうこと」だと言えるかもしれません。ここで我々が「住まうこと」の環境を具体化するものが建築だとするのであれば、建築とは単なるシェルターではないのではないかと。また「住まう」ということは具体的な場所に住まうことであるため、我々は建築を通じて場所を読み取りながら、場所を作っているということになります。そのために建築は独自の性格をもった空間となるのです。

「ゲニウス・ロキ」という言葉を直訳すると「場所の霊」といった言葉になります。建築するということは、その場所がこうあって欲しいと思うような漠然とした何かを共同作業で視覚化し、結果的に有意義な場所を作り出すことだと思います。また、建築家の仕事や、建築を通して皆がしていることとは、「住まう」ということを手助けすることだと思います。

このことは建築のみでなくどんな仕事にもあてはまるかもしれません。私たちは建築という行為を通じて「住まう場所」を作っているし、その他の職業の人は違ったものを通して「住まう場所」を作っているのではないかと思います。このようなことが皆で共有されていくと、現実社会において市場主義のようなものと違う共有できる考えに到達できるのではないかと考えています。私は、若い世代の人々がいろいろな問題を抱えるこれからの社会において、仕事として、社会的な貢献として、生きていくことそのものとしてこのようなことを考えて欲しいし、具現化して欲しいと思っています。他にもいろいろ考えはあるでしょうし、現代社会の多様性に本当に適合する場所というものを作ることはなかなか難しいでしょうが・・・

また、シュルツは他にも「全般的に無気力な社会と、売れる可能性がなければ改善を受け入れない利権主義社会が原因」として、このままいくと環境問題のようなものは絶対に解決しないと述べています。彼はそういったことを変える考え方を提示したいと思っていたようです。また彼はそう考えの中で、建築がどうあるべきなのかということよりも、人間の生活がどうあるべきかということをもっと議論していかなければならないとも言っています。よって彼は建築論というものがあるとしたら、建築作品の分析や解説にとどまらず、その「建築」と「それを生きた人」が、どのように共

に生きてきたかということ議論しなければいけないのではと考えているようです。そして彼はその先に場所の本性である「ゲニウス」と「ロキ」が実存的に重要であると考えていたようです。

私は場所というものは非常に重要なものだと思います。何かを作るときには必ず場所と一緒に考えなければならないし、「建築計画」も場所という考え方を抜きにしては考えられないと思います。また景観は、表向きだけ取り繕ったとしても全く意味が無く、「場所」と「人」がどのように共生するのかを考えなければならないと思います。建築家ではないのですが、オギュスタン・ベルクも場所が重要と言っています。最近は共生という考え方をあちこちで耳にしますが、「場所」と「人」とが共生するという考え方は聞きません。しかし、こういった考えがあると思うのです。

従来の建築の作られ方、従来の都市の作られ方、従来の建築計画でも、市場主義のせい、ボリュームやスケールは大きければよいという考えがベースにあるような気がします。建築法規もそうですし、開発でもそうなのですが、大きい方が有利になるようになっていきます。そして大きく考えることで、個々では考えることのできなかった理想的な環境が作られるのではないかと考えます。また当時は、たくさんの人がいるにも関わらず住むところがなく、大量に短期間に住むところを作る必要があったというように、社会的な背景でもそのようなことが必要となる時代でした。

しかしこれからの時代は、過去につくられた環境を、次の時代ではあまり手がかからなく持続可能なように作り替えていかなければならないだろうし、「大きく」作られた考え方を「小さく」作る考え方に戻していかなければいけないと思うのです。「小さく」作られていくと、それぞれの場所が皆違う場所だと気づくでしょうし、そうでなければ「小さく」作れないと思うのです。標準設計という考え方も、場所の論理を加えていけば、全く違ったものになるでしょうし、標準設計で作られたものでも、場所の論理を加えていけば、自然と「小さく」作られていくと思うのです。

また、日本の法律は「純化主義」で成り立っています。例えば第一種住居地域には独立住宅しか作ってはいけない等です。しかし長く続いてきた街は混在したものです。また、私たちが魅力的に感じる街というものも、高さや大きさのそろった街だけではありません。街に塔のある教会があったり、市役所に街が展望できるような塔があったりと、高さにいるような変化があって、それらが周りの地形にうまく適応しながら出来てきます。それに対して日本の法律は、建物を整理して多様な建物を混ぜないようにしています。例えば住宅とオフィスは全く違う建築基準法でできており、オフィスを住宅にしようと思うと建築基準法の制約をクリアするのがなかなか難しいなどです。しかし、それらは生活していく場所として、そんなには違わないと思うのです。これらを解くテーマとして、それぞれの場所に注目して、「小さく解く」「混ぜて解く」ことが必要でないかと思っています。

ルシアン・クロルという建築家がありますが、彼は「サステイナブル・アーキテクト」という本の中の『「ペイサージュ」の思想』という部分で、「形は、昔の景観の形やその模倣をすることではない。まして冷やかな幾何学を描くような無駄のないモダニストの好むフォルムでもない。」と言っています。そして、「それは、できる限りもとの文脈を大切にしながら、今日ある日常の複雑さを辛抱強く織り込めるようなフォルムである」と言っています。つまり、整理をして単純な形にするのではなく、複雑なままでもいいのではないかとということです。私もその通りだと思います。私はそういったことを考えると、建築は中のことだけ考えればよいのではなく、中と外との関係を考えることが特に重要だと思います。私は、中と外との関係を取り持つためには、中から外がどう見えるか、関係をもつかということはもちろんあるのですが、街を歩いている人が、どうすれば建築と関係を持てるのかということを考えることが非常に重要でないかということをよく言います。しかし、今の日本の建築は街を歩いている人との関係性を閉じるようにできているように思います。

日本では、インフラの整備を建築個々の力によって整備していこうという発想によって、建築の道路側に緑を植えたら容積率を乗せできるというような制度があります。しかし、このことにより建物はどんどん道路から離れていき、建築が遠くなってしまいます。建築と道路の間に大きな緑ができてしまうと、建築と街路、街路を歩く人々との関係が更に遠くなってしまいます。そのために街は、次第に、歩いていてもつまらないものになってしまっていくのです。このことが有用となる視点もあるのですが、私はむしろ逆の発想で、建築はもっと道に近づいていくべきだと思っています。この建物を道に近づけていく方法では、建築を道から離して行く方法と違い、人間の身体的なスケールを考えることが重要だと思います。そしてこのように、建築が社会に近づいていくほど、社会の安心・安全が得られる環境になっていくと思います。よくオートロックにして閉じれば閉じるほど安全が得られると思われていますが、いったんその中に入ってしまうと外から中が見えない世界ができてしまいますから、結果的には危険な領域をたくさん作ってい

るような気がします。

また、先ほど申し上げた高さの関係でも、日本の法律は高さを低くしましょうという考えが多くを支配しています。そのため、高さに高低の変化のある集合住宅を作ろうと思ってもなかなか作れません。また、低く抑えた中で、横一線の高さ制限をしてしまうと、容積率を効率的に使おうと考えた場合、隙間のない壁にしかありません。逆に、高さが周囲より少し高くなったとしても、下の部分に隙間を作った方が、風も抜けるし、視線も抜けるし、コラージュ的な風景ができ、全体としての環境はよくなると思います。こういったことは建築だけを考えると到達できない話であり、私たちは法律を含めて議論できる環境を作っていないといけないと思います。法律を司っている人々はそういったことに対して、野放図になる訳にはいかないと言いますが、私はそういったことを一律に解くのではなく、丁寧に個別的に解いていく必要があると思います。

この写真は奈良県の大和郡山市の稗田という集落です。集落は1400年頃にできたと言われています。この集落は、写真の上方に写っている戦後できた新興住宅地と比べ、実際に行ってみると明らかに気持ちの良い空間となっています。中の街区割りは、規則正しくなくてぐちゃぐちゃなのですが、次の時代はこのような気持ちの良い空間、建築と街との関係をどのようにしていくのかを考えていかなければいけないと思いますし、このような空間を計画的に作っていく技術とはどのようなものかを考える必要があると思います。もちろん、生産のシステムや暮らしのシステムは現代とは違うのでしょうけれども、生活を少々変えてもこういったものを残した方がよい時代になってきています。そこで、私たちは、なぜこれらの集落や空間が現在も残っているのかをもう一度考えていかなければいけないと思います。若い人には現実の仕事の視点と、こういった視点の両方から考えていって欲しいですね。

ここから先は、仕事として実際にやってきたプロジェクトや、学生と一緒にやっているプロジェクトを観ていただきます。

「広島市営庚午南住宅」1982 広島市

建物を、セットバックしている部分としていない部分とを混ぜて配置し、下部のボリュームの上に別のボリュームをのせているような形態とすることで「小さく解く」「混ぜて解く」ことを狙っています。一つの解き方では繰り返しの大きな物になってしまうので、いろいろな考え方をミックスさせて作っていけば立体的な集落のようなものができるのではないかと考えたプロジェクトです。できた当時と今を比較してもほとんど変わっていません。また、この集合住宅のバルコニーは通り抜け通路という空間を挟むことで隔て板が不要のようにしています。バルコニーが繋がっていると隔て板がないと不安ですが、分けていることで問題は無くなり、お隣さんとの関係性が生まれます。また、建物の真ん中を風が抜けたりします。「小さく解く」「混ぜて解く」とコラージュのような風景が自動的にできていくではないかと思っています。塗装や色や素材も、質感も違うものを様々に混ぜて使っています。いろいろなものを混ぜていくと、スケールはヒューマンなものになっていき、よくなっていくのではないかと思います。

このプロジェクトは発注者の広島市の判断で、基本設計だけで一度中止となったのですが、住民の賛成によって再度復活したものです。よく考えると、私たちが今までやってきたプロジェクトにはそういったことがたびたびあるような気がします。ここだけ特別なことをするのかとか、行政的な標準的管理のことを考えると「小さく解く」「混ぜて解く」ということは一番してはいけないことのように感じられますが、結果的には問題は生じていません。ここでの「住民参加」のように、住民参加とは住民の意見を聞くことではなく、住民の潜在的な要望にこたえることで愛着を持ってもらうことだと思っています。

ただし、この計画で一つだけ考えに迷うことがあります。それは屋根瓦の色を赤い色にしたことです。この色は師匠の藤本が広島出身で、瀬戸内の風土には赤い瓦が合うということで出来ています。しかし今思うと、周囲はみな赤ではなく、この場所だけが赤い瓦であり、周囲との連続感に欠けているのではと思うのです。やはり屋根も周囲にあるものとなじんで欲しいなと思います。逆に、このプロジェクトの20年ほど後になる御坊のプロジェクトでは、屋根の素材自体を多様に混在させています。周囲との連続感をうまく創り出したいと思っています。

「ウディタウンすずかけ台住宅街区」1985 住宅・都市整備公団

公団の宅地開発の仕事です。当初は、マンションと戸建ての間のような「タウンハウス」で計画されていたところですが、タウンハウスそのものが日本ではあまり受け入れられなかったので、戸建て住宅で集落の様に作れないかと試みたものです。建築自体をいじるのではなく、しっかりと場所との関係があれば、それに合わせて集住空間が作れるのではないかと考えました。

このプロジェクトで私たちが設計したものは、道路の構成、区画割りです。この場所ではいろいろな住宅を作る人との協働のなかで、私たちが、道路だけでなく建物の周りの擁壁を含むまちなみ外構を設計できることになりました。100戸以上ありましたが、すべて場所に応じて異なった形で、考え方は共通にして作って行きました。このような仕事は建築だけをしているとなかなかできない仕事です。実際にこの仕事は、一級建築士事務所の資格とは関係のない仕事でした。この様に場所を作っていくと、建物自体を自分達で設計しなくても、建物は自然とその場所にあった建ち方になっていきます。建築物ではなくて、場所を作っているのです。

このプロジェクトは航空写真だけでは特別なことをしているように感じませんが、近くにしてみると普通の街とは違った雰囲気のある集住環境になっています。住民の人も街に愛着を持っているため、いつ行っても綺麗な環境になっています。また、擁壁の下の道路の部分に植栽帯があるため、人々は花の手入れをするために通りに出てくるようになりました。

「藤原台住宅地のまちなみ設計」1985年 住宅・都市整備公団

このプロジェクトは公団の宅地部隊と一緒にやりました。当初は公団から、自分の敷地部分が擁壁よりも下にあるなんて関西では絶対に受け入れられないとか、擁壁の色が緑色では受けないからすべて白く塗ってくれないかとかいろいろ言われて、今思うと紙一重のプロジェクトだったように思います。月日が経ち、部分部分で擁壁の塗装をし直している部分はあるのですが、個別な更新で、全体で一斉にやっている訳ではありません。今思うとこれも「小さく解く」「混ぜて解く」ということなのかもしれません。

このプロジェクトでは材料も開発しています。このまちなみを形成するブロックは、表情がすべて異なりますが、実は工場で作られています。普通は工場で作られると機械的に同じものができてしまいます。しかし、このブロックは2つのブロックで1セットの形で出来上がり、ブロックの中心、背割りの部分を2つに割ることで、ブロックの1つ1つに異なる表情が生まれるようになっています。種石も青石という自然の石の粉を使いました。また、コンクリート部分の塗装にもグリーングレイ色のアクリルカラークリアというコンクリートの質感を出せるものとして、違った表情を出すようにしています。大きさも従来のブロックは200×400の大きさですが、プロポーションのよい150×500とし、目地を深くとることで影が生じるようにしています。こういったことにより、その場所にしかない独特の場所が生まれるのではないかと考えています。

こういった説明をさせていただくと、建築の箱を作る以外の仕事も、あなた達の将来の仕事であるということがよく分かると思うのですが、残念ながら大学教育は「土木」と「建築」のカリキュラムが全く異なり、分かれています。ですから「土木」と「建築」がもう少し混ざっていたらよいのと私は思っています。私が非常勤講師として最初に大学に行ったのは、立命館大学の土木、名前は環境システム学科でした。そこでは環境デザインの演習を教えていました。私は、非常勤を依頼されたときに、教える授業が「建築」単体だったら、それは他にも教える人がたくさんいるだろうから断ろうと思っていたのですが、土木の演習だったのでやってみようと思ったのでした。立命館大学では「建築」と「土木」が一緒になったようなカリキュラムとなっていました。私の研究室でも「土木」出身の人が大学院から入ってきて一緒に活動をしています。私は、機が熟したら、関西大学でも、土木（都市システム）学科で空間デザインの演習ができるようなカリキュラムが出来ないものかと思っています。そして「土木」と「建築」の学生が一緒になって空間デザインの議論ができる環境になっていったらよいと思っています。

私は土木学会員ではないのですが、土木学会デザイン賞をいただいたこともあり、その土木学会デザイン賞の審査委員をしたり、今では、土木学会の景観デザイン委員会の委員をやっている、議論を交わしています。建築分野の人は、内藤廣（今は東大の土木の先生ですが）ぐらいでしょうか。

「アルカディア21」1989 兵庫県住宅供給公社

住宅地の環境設計をしたプロジェクトです。このプロジェクトでは、住宅地の擁壁と道路を連続させるように石を敷き

詰め、側溝をなくし、例えば季節や時間と共に変化する影が、どのように環境を豊かにしていくかということなどを考えていました。影の変化というものはなかなか図面には表しにくいですし、模型を作ったとしてもなかなか表現できません。しかし影のない場所はこの世界にはどこにもありません。初期のCGパースには影がなく、非常に嘘っぽかったことを覚えています。

また擁壁を斜めにして、こうテーパーを入れると、目地には自然に苔が生えてきます。計画の時から、苔が自然に生えてくることを想定してデザインしました。苔は垂直面には生えませんが、斜めになると生えてくるのです。このような発想は私たちが学んできた建築にはなかった様に思います。このアイデアは尾道を旅行した時に発見したものです。道を歩いて斜めになっている所に苔が生えていた事により気がつきました。

また、ここでも敷地境界から下がった所に擁壁があります。道路側に木が植えられていますが、これは公共のものではなく個人のものでした。自分の敷地の中の道路レベルに木が植えられていても、周りの家も同様な作られ方をしているので文句はでませんでした。

側溝も、先ほどのプロジェクトと同様に工場生産していますが、それぞれが異なる表情となるように工夫しています。何回も試行錯誤して作りました。写真の幅員2メートルの歩行者道路には、分からないでしょうが真ん中に側溝があるのです。これらも「混ぜて解く」という発想がそうさせているのかなと思っています。

また、この街区の公園は公共のものではなく、街区の住人の所有物です。しかも他の人が入らないようにするのではなく、入ってもいいけれどもきれいに使ってくれと言っています。実はこのようにするために、いろいろなところと協議して法律を変えてもらいました。固定資産税の額を減免してもらっています。私は法律を変えることもデザインの1つだと思います。先ほど申し上げた高さ制限の問題も、高さ制限は撤廃するけれども、それで容積を増やさないという協議をしています。このようなことも、これからの皆さんの仕事だと思います。法律を変えて、より良い環境を作っていくことはまだまだ難しいですが、昔よりはやりやすい時代になってきています。今日のお話で皆さんに、このようなことが無理な事ではないということに気がついてもらえたとすれば、今回の講演も意味のあるものになるかなと思います。

「緑のタイルの家」1991

私が初めて設計した個人住宅です。この住宅の外壁は緑色のタイルです。このタイルもこの住宅のためにINAXでつくりました。個人住宅のためにコストの安いそれも少量のタイルを製作することはなかなかできないことでしたが、協力していただき製作してもらいました。高いものではないのですが、豊かな表情の、天候などの状況によって表情が微妙に変わる良いタイルを創ることができました。写真で見ると少し派手な色にも思えますが、街にとけ込んでそんなに目立たないようなものになっています。また、タイルに釉薬がかかっているのです。完成してから相当に年月がたっていますが、ほとんど汚れていません。

この住宅も、すでに別の建築家が設計していた大きな一つの箱でできている計画があったのですが、相談をされて、小さな家族でそこまで大きな箱の中に住むことはないのではないかと率直に意見を言ったところ、それでは設計してくれということになって、もう少し小さな箱が複合的に合わさっている形にしました。この周囲はお屋敷街なのですが、大きな塀や石垣に囲われて、生活の表情が道路に現れてこないような建物ばかりです。そこでプライバシーを確保しながら建物を道路側に寄せて、夜になったら道路側に光がこぼれる等、人が住んでいる感じ、気配を道路側に見せていければと思いました。

「六甲アイランドCITY」1993

六甲アイランドのプロジェクトです。六甲アイランドは内陸部と空の明るさが違うため、明るい空に映えるようなブルー等のいろいろな色を混在させて使い、できるだけ小さな単位が複合して見えるように計画しています。

「ローレルスクエア登美ヶ丘アーバンデザイン」1996

学園前の北、登美ヶ丘でのプロジェクトです。街の中央部にまとった広場を配置し、それを取り囲むように、道路沿いに多様な建物が建ち並ぶ配置計画としています。

「西舞鶴駅前緑地広場」1994 舞鶴市

西舞鶴の駅前に広場を作るプロジェクトです。この塔の部分ですが、私たちは最初にもう少しモダンな形を提案したのですが、住民は西舞鶴の歴史的な事柄を想起させるようなものを求めていました。一歩間違えるとテーマパークの様な

ってしまいそうだったのですが、なんとか頑張り、そうならないように、いぶし平板瓦をモダンに用いて、塔の上部だけを歴史的な形にしました。瓦平板の広場を持ち上げ、その立ち上がりの外周部分をガラスブロックとし、内部に照明を設け、広場自体が夜は常夜灯のようになるようにしました。その後、この場所に電化促進のための仮設看板を作ってくれと頼まれ、いろいろ考えて、神社の「のぼり」のようなものを苦労して作りました。これは布の素材も色調もなかなか街にあった素敵なものでしたが、無事電化され、役目を終えました。

さらにその後、西舞鶴駅の設計も頼まれました。この駅はただの駅ではなく、舞鶴市の施設を併設したものでした。設計を始めると、市の小学生の描いた駅のイメージ、お城の形をモチーフにするようにとの要請が来て、ずいぶんと協議を重ね、その依頼は勘弁してもらいました。直な形ではなく、この場所から城下町の佇まいが見えたり、城下町を感じられるような素材で、現代的な駅空間としています。結局、学生や子供に喜んでもらえるような場所ができています。

「南淡町営賀集団地」1997 兵庫県南淡町（現 南淡路市）

淡路島の公営住宅のプロジェクトです。このプロジェクトでは「小さく解く」「混ぜて解く」ことはもちろんですが、若い人たちに住んでもらいたいという町営住宅でしたので、リビングの前にテラスがあって、子供たちが遊んでいるのが台所仕事時の母親から見えたりするような、そういった空間構成をテーマとしました。

「大山溝口の山荘」1995

小さな別荘のプロジェクトです。依頼された敷地ではせっかくの場所の特性を活かしくかったので、谷に面した売れ残りの細長いへた地と敷地を交換してもらい、その小さな敷地だけを敷地と捉えずに、谷全体を敷地と捉えて計画しました。

「夙川・高塚町の家」1998

住宅のプロジェクトです。最近の住宅地は暗くて楽しくないので、夜間に外部に光がこぼれていき、人の住んでいる気配が街に滲みだしていくような家にしようとしています。

「御坊市営島団地再生」2001 和歌山県御坊市

スラムとなっていた改良住宅団地の再生プロジェクトです。ワークショップをしながら、いろいろな住民と一緒に作っていったプロジェクトです。やり取りのなかで住民に納得してもらい、普通ではできないような、南側に廊下があるような、小さな立体集落ができあがりました。場所との応答関係をベースに解いていますが、相当複雑に見えるかもしれません。わずか100戸に満たないプロジェクトですが、都市計画学会賞（計画設計賞）をもらっています。それまでの他の受賞プロジェクトは相当に規模の大きなものばかりで、時代の変化を感じさせるものでした。

「チャンネルタウン兵庫・チャンネルタウンウエスト」1999 都市基盤整備公団（住宅・都市整備公団）

兵庫駅前にある高密度なプロジェクトです。街の中心に運河を引き込み、建物は高低の関係を作り、建物の足元に開かれた街を作ることを意識しました。公団の賃貸住宅団地とは思えないような、まちに開かれた集住環境が実現していると思います。高密度でボリュームが大きいので、できるだけ小さなものがコラージュのように重なり合っているように意識しました。

「芦屋市若宮町住宅・震災復興住環境整備」2001 兵庫県芦屋市

芦屋での震災復興のプロジェクトです。震災復興での再生ですが、もとの街のようにいろいろ混ざり合った街に再生しようと考えました。そのため、小さな公営住宅を街の中のあちこちに分棟分散配置させるようにしています。公営住宅のボリューム感を出来るだけ消して馴染ませるように、配置上の軸線をずらすという操作をしています。階段などでもできるだけ繰り返しに見えないように意識して計画し、新しいが懐かしい、マチとしての集住環境の実現、再生を目指しました。結果的に、この公営住宅自体も、集住環境としてのマチ自体も、単に形態の操作をしているのではなく、「小さく解く」「混ぜて解く」カタチになっているように思います。

「南芦屋浜復興公営集住街区」1998 兵庫県、芦屋市、都市基盤整備公団

これも震災復興の公営住宅です。建築は建ったときに意味がないといけませんが、その意味が建った後にすぐに理解されるものばかりではありません。埋立地に建てられたこのプロジェクトは、建てられた当初は周りになにもなく、六甲山や海が見えるだけで、身近な周辺との連続性の感じられない建物群にも見えかねないものでした。しかし現在では近隣にヨットハーバーや商業施設もでき、新しい芦屋の海浜住宅市街地としての美しいコラージュ的な風景ができあがっ

ています。ヨットハーバーがあるようなお金持ちの街と、社会的弱者の公営住宅とが上手に共存できる街ができたのかなと思っています。エレベータの方向も調整して、アクセスの際に街や海が必ずよく見えるようにするなど、埋立地ではありましたが、将来の姿を想像し、それらとの共生を考えた空間設計をしています。このように、これから先に街がどう作られていくかということも想像して、この場所ならではの魅力的な集住環境を設計していかなければならないと思います。

「目神山の集会所」2006

目神山に建てられた集会所です。この地域にはお葬式や選挙をするような場所がなかったため、住民の方が西宮市と交渉し、調整池の中に集会所を建てることとなりました。住民の中には建築家の石井修さんもいらっしゃいまして、積極的に調整池の中の集会所企画を進められましたが、ご自身では設計をされず、私が依頼されることになりました。

私は調整池の構造物や水面に負荷をかけないことを原則として設計を進めていきました。最初はそれらに全く負荷をかけないように、建物を鉄骨造にして調整池の外側から建物を吊る方法を考えていましたが、石井さんから木造空間で計画するように依頼され、計画を変更することにしました。しかし、最初の鉄骨造の案と同様に、調整池に対してできるだけ負荷をかけないようにするため、かつ、水面は出来るだけ大きく確保するため、床伏せの部分は鉄骨造にし、池の外に基本の基礎と水回りが来るようにして、池からはその鉄骨床伏せを3本に開いた1本基礎で受ける計画としました。住民が負担する建設費がなかなか工面できず、この面では非常に苦労しましたが、なんとか完成させる事ができました。水面に反射した光が建物内部にきらきらと映り込み、池の上にあるからこそその環境になったと思います。

偶然にも住民の方の中に関西大学の先生がいらっしゃって、この場所がよく使われていることを伺っています。これからは地域の集会所のような計画もどんどん増えてくるでしょうが、このように場所がなくても、公共的な物を上手に利用して建物を建てることもできるということも、今後、若い皆さんには考えていただきたいですね。

ここから先は関西大学で、学生諸君と一緒にやっているプロジェクトを紹介したいと思います。

「カンボジア・カンボンブロック村とその周辺調査」2005~

本で見つけた一枚の写真をもとに、別件で一緒に行ったベトナムのついでに学生がカンボジアに足をのびし、この村を捜し発見し、その学生がこの村をフィールドに修論を書きたいということから研究室で調査団を結成し、実測調査をはじめ、もう6年ほど続けています。

写真のようにトンレサップ湖上の水上集落ですが、一年の半分は水に浸かっているのですが、残りの半分は水がなくなります。水がなくなる時期は、美しい空中集落となります。また、この時期には、村から少し離れたトンレサップ湖の浅い水面上に、仮設の集落を作るというユニークで美しい集落です。

学生はこの村に水のない時期、水面の時期、それぞれ1ヶ月間ほど滞在し、2年かけて手作業で実測調査し、集落の住戸や配置の全貌の実測図面を作成しました。

この集落の建物は、材料を縄で縛るといふ、非常に単純なディテールでできています。縄でしばり、縄をほどくことで変化する自然の状況につきあった住空間を獲得しています。簡単な手法によって持続的な環境を継続しているのです。実測図面や発表原稿などをまとめた本を夏に刊行しました。A3の大きな本になりますが、ご希望の方は、案内を受け付けにおいてありますので、それで申し込んでいただけたらと思います。

「TAFS佐治プロジェクト」2007~

丹波の過疎の村で、学生と共に地域と交流し、街との関わりを探るプロジェクトです。「関わり続ける」定住のカタチ」を合言葉に、学生が地域と交流しています。地域の職人の指導のもとで、空き家を学生たちがリノベーションし、それを大学のスタジオにして、そこを拠点に合宿授業や、さまざまな地域活動を継続しています。

「仁川団地・浜甲子園団地改修プロジェクト」2007、2008

取り壊しが決まっている団地の住戸を、学生が解体・改修するプロジェクトです。このプロジェクトは、こちらにいらっしゃる大坪先生と協働しています。いくつかの大学で協働でやっているプロジェクトです。このプロジェクトでも、われわれの研究室では、コストが限られた中で学生が自ら解体から施工までを行い、現場で考え、その場所との応答の中で、「小さく解く」「混ぜて解く」を実践しています。

私は、これらに代表される具体のプロジェクトを通じて、次の時代の「環境」とはどんなものか、そのために建築は何をなすべきかを考える材料、機会を学生諸君に提示し、共に感じ考えることが、大学人として教育や研究に関わっていく意味だと思っています。

以上です。本日はご静聴どうもありがとうございました。

(大坪)江川先生、本日はどうもありがとうございました。1時間半くらいの講演の予定でしたが、2時間以上も話していただきました。(笑) 学生の皆さんに伝えたいことが、たくさんあったのだと思います。江川先生のような方に、いろいろなことを教えてもらうことのできる学生さんは幸せだと思います。

本日はこの会におこしいただき、ありがとうございました。
